

「背負ってたものを下ろせました」

関西学院大学フイターズのQB（クォーターバック）で4年生の鎌田陽大はそう言って、ホッとした笑顔を見せた。12月17日のアメフト学生日本一を決める甲子園ボウルで、関学は法政大学に61-21で勝って前人未踏の6連覇を達成。花形ポジションのQBで先発出場したのは2年生の星野秀太だった。

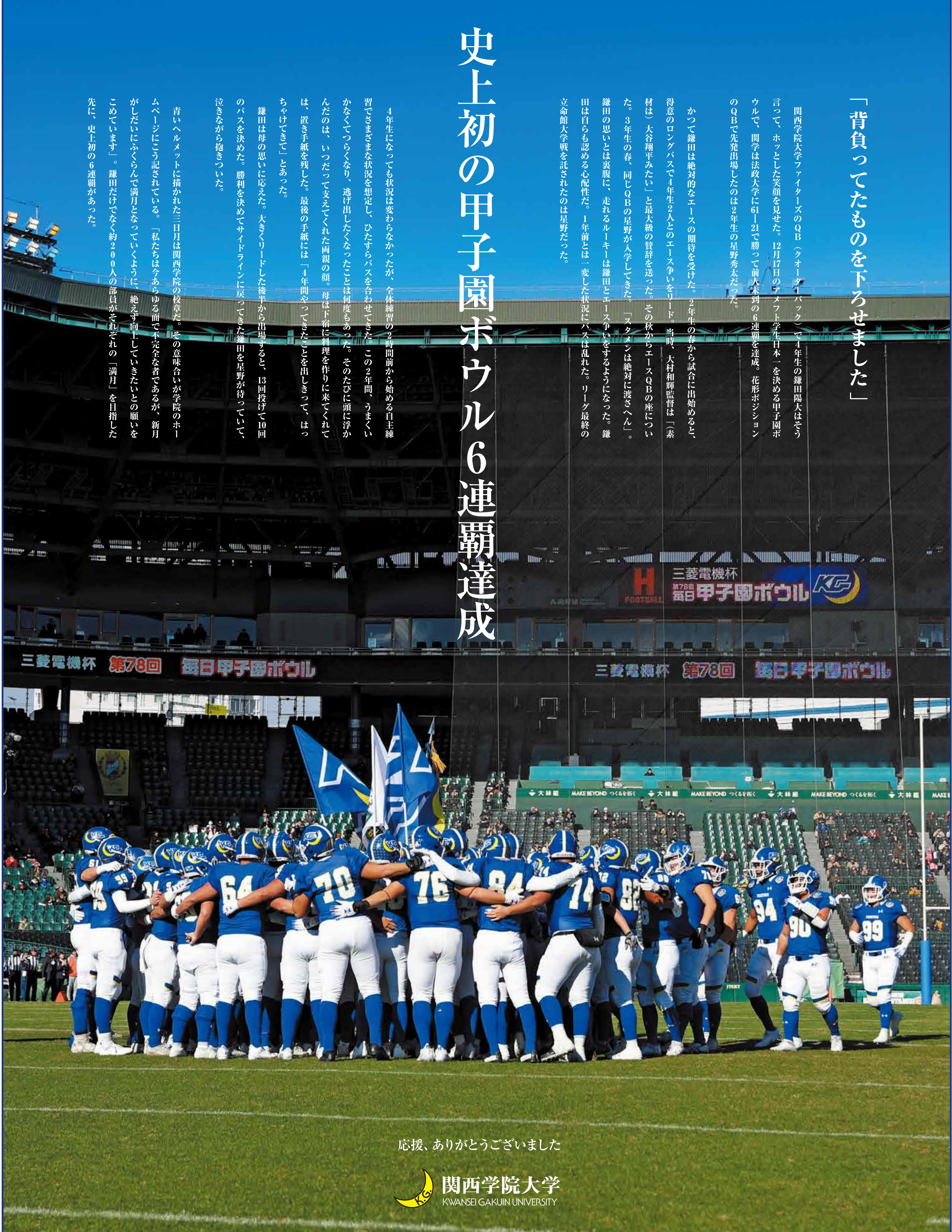
かつて鎌田は絶対的なエースの期待を受けた。2年生の春から試合に出始めると、得意のロングパスで4年生2人とのエース争いをリード。当時、大村和輝監督は「素材は」大谷翔平みたい」と最大級の賛辞を送った。その秋からエースQBの座についた。3年生の春、同じQBの星野が入学してきた。「スタメンは絶対に渡さへん」。鎌田の思いとは裏腹に、走れるルーキーは鎌田とエース争いをするようになった。鎌田は自らも認める心配性だ。1年前とは一変した状況にパスは乱れた。リーグ最終の立命館大学戦を託されたのは星野だった。

# 史上初の甲子園ボウル6連覇達成

4年生になっても状況は変わらなかったが、全体練習の2時間前から始める自主練習でさまざまな状況を想定し、ひたすらパスを合わせてきた。この2年間、うまくいかなくてつらくなり、逃げ出したくなったことは何度もあった。そのたびに頭に浮かんだのは、いつだって支えてくれた両親の顔。母は下宿に料理を作りに来てくれては、置き手紙を残した。最後の手紙には「4年間やってきたことを出しきって、はっちやけてきて」とあった。

鎌田は母の思いに応えた。大きくリードした後半から出場すると、13回投げて10回のパスを決めた。勝利を決めてサイドラインに戻ってきた鎌田を星野が待っていて、泣きながら抱きついた。

青いヘルメットに描かれた三日月は関西学院の校章だ。その意味合いが学院のホームページにこう記されている。「私たちは今あらゆる面で不完全な者であるが、新月がしだいにふくらんで満月となっていくように、絶えず向上していきたいとの願いをこめています」。鎌田だけでなく約2000人の部員がそれぞれの「満月」を目指した先に、史上初の6連覇があった。



応援、ありがとうございました